

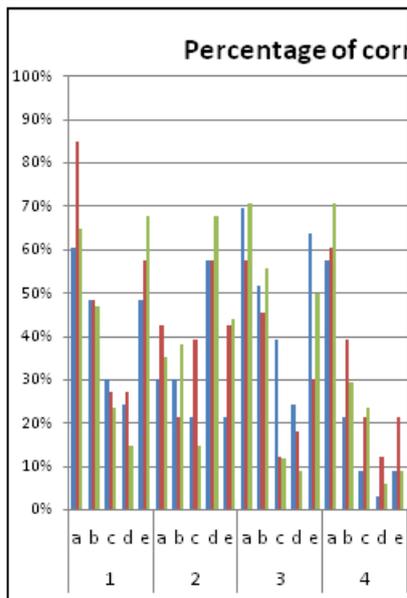
ザンビア通信 vol.9

青年海外協力隊 平成 22 年度 3 次隊

ザンビア 理数科教師 金田直己

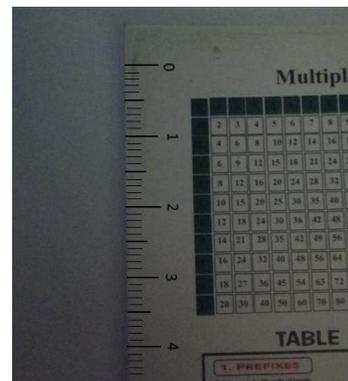
ザンビアの学校の 3 学期には中学・高校・大学に進学する為の国家試験があります。10 月中旬から順次始まりますが、この期間は多くの学校で通常授業がなくなります。それぞれの教員たちは国家試験に携わり、教員たちと共に何かをする私の配属先である教員リソースセンターの大方の活動はこの期間は難しくなります。

当初計画していた教具作成紹介のワークショップをせめて一回は実施したいと考えていました。しかし肝心の同僚が全然出勤してこないという事態。自分一人でも計画・実行することは可能でしたが、ザンビア人と一緒にやらないと意味を成さないと考えていたのでとにかく出勤してくるのを待ちました。やっと同僚が来て急いで準備をしましたが時すでに遅し。周辺校のザンビア人教員は国家試験関連でそのようなワークショップに参加することは出来ないという状況でした。



もちろんこのような状況なのでリソースセンターの柱である授業研究も実施することは出来ません。そこで今後の授業研究のテーマとなるような生徒の苦手とする分野の調査を行う事にしました。これなら教員が忙しくとも生徒を集めれば実施出来そうだと考えました。リソースセンター周辺校 3 校に対して共通テストを実施しテスト結果を見える化して低回答率の箇所に対する自分なりの教授方法案も添えて提示してみました。(左図) 今後この結果を使って授業研究を実施してくれる事を願っています。

教員を巻き込んだイベントが難しい状況下ではリソースセンターのメインとなる活動をする事が出来ないのです。これまでカピジンパンガで実際の教壇に立ってみて学校現場で気付いた事などを州教育事務所向けて発信しようと思い幾つかレポートを出してもみました。例えば、生徒は定規を持っていないので直線を書くときにはノートの手元を使えとこれまで私は言ってきました。また彼らのほとんどは長さに関する感覚が無いので売られているノートのエッジに目盛りを付けてみては？(右写真) という提案だったり、教育事務所スタッフが科学の語句記憶の為に



クロスワードパズルが有効だと豪語するのでパズルの作り方を提案してみたりしました。



またザンビア教育現場にはお金が無い無いは言うものの他の近隣諸国に比べ環境は整っているほうだと思います。机・椅子に関して現場の学校には直せば使うことの出来る状態の物がたくさんあるにも関わらず次々に新しいものがやってきます。(左写真) このような供給過多の状態であることは教育事務所側当然知っているはずで、より有効に貴重なお金を使ってほしいものです。

時が経つのは早いものであつという間に2年が経ち1月初旬に帰国しました。今は自分が日本に居ることが何か一種の違和感すらあります。単一的な人種・溢れるほどの人・街を歩いていて声を掛けられることもありません。料理を注文して1時間も2時間も待たされることもありません。日本に居るだけでは知る由も無かったアフリカ・ザンビアの現実を肌で感じる事が出来ました。日本人とザンビア人とで物の考え方で大きな違いがありザンビアに渡った当初はそれに対して憤りもありました。しかし日本でも各家庭でそれぞれのルールがあるように各国でルールや考え方が違うのは当然の事だと思うようになってからは大分気持ちが楽になりました。そしてザンビア人が我々日本人と異なるのではなく、日本人の我々がザンビア人と異なるのだということ。

またその中で他の所から来たよそ者がその土地に何かを残すことはとても難しいことだとも実感しました。今回私の2年間の活動の中で多くの物は残せなかったかもしれません。強いて言うならばカピジンパンガの生徒がこれからの将来の中で日本人(もしくは外国人)が来て授業をしていったという記憶を下に、外の広い世界に少しでも目を向けるような彼らの心の中に何かしらのインパクトを残せていたらと思っています。



2年前に豊橋を発つ際に「生きて帰ってこれるのかな」「もしかしたらこれが最後の豊橋かな」なんて不安も過りました。生きていることに感謝しながらこのザンビア通信を終わりたいと思います。今までありがとうございました。・